

## 第19話 平氏の滅亡

平家は西国で再び勢いが盛んになって、摂津の福原まで引き返したが、その後、戦う毎に源氏に負けて、ついに長門の壇ノ浦で一家一門が悉く滅びる。

## 平家、福原に拠る

源氏が都で同士討ちをしている間に、平家はますます西国に勢力を広めて、寿永3年正月、範頼、義経らが義仲の征伐に向う頃には、既に屋島を出て摂津に移り、元の都の福原に安徳天皇の御所を造って、将に京都に迫ろうとまでしていた。

そもそもこの福原は、嘗て清盛が選んで都としようとした処だけあって、頗る要害の地でした。北は山、南は海、その間こそ狭かったが、東西に長く伸びていたから、平家は生田の森を東門とし、一の谷を西門として、その間およそ3里(12km)の間に、その勢十万余騎で、一家一門悉く立籠もっていた。その上、海には数百艘の船を浮かべて、敵の寄り付く隙もなくしていた。一面に立て並べた数千の赤旗が吹く春風に翻っているさまは、燃え上がる猛火のようで、美しくもまた勇ましく、たとえば、いかなる大軍が押寄せようとも、これを攻め落とすことなどは逆も出来そうに見えなかった。

## 範頼、義経の京都進発

時は寿永3年2月、義仲が亡びた翌月の事です。範頼、義経の兄弟は後白河法皇の仰せを受けて、福原の平家を討つために京都を出発した。範頼は56,000余騎を率いて、本街道を東門の生田の森に向かい、義経は10,000余騎で、丹波路から西門の一の谷に向った。

この丹波路は険しい山坂つづきであった上に、道程も遠かったが、義経は、東西の両門を同時に攻めるようにするためにと、2日路を1日で馳せて、丹波、摂津、播磨の国境になっている三草山の東の山口に着くと、その西の山口には、平家の先手が7,000余騎で彼の前進を食止めようと陣を取っているのに出会った。義経はその夜の夜討ちで一気にこれを打ち破ると、進んで一の谷の裏山まで駆け抜けたが、そこで、兵を2手に分けて、1手は土肥実平に7,000余騎を授けて一の谷の陣門に向わせ、自分は3,000余騎を率いて、裏手の山の鶴越から敵のうしろに出ようとした。

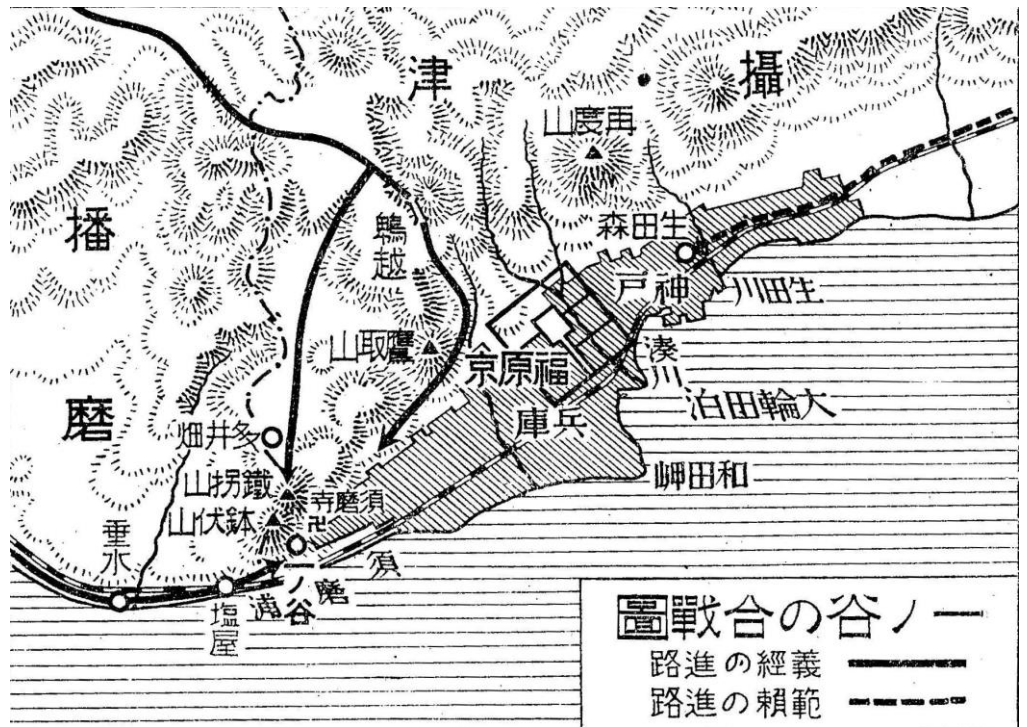
## 鶴越の陰

しかし、鶴越の険阻な事は話しに聞いていたよりもひどかった。第一に、木陰が深く茂って、路も見えないのに、日さえ暮れてしまったので、指して行く見当がつかない。道案内をする者を武蔵坊弁慶に求めさせると、彼は遥かの谷底に幽かな燈火を見つけて、行って見た。年老いた獵師がいたが、自分はもう年寄りでだめだからとて、代わりにその子を進めた。

義経はその子が丈の高い、たくましい、りっぱな若者なのを見て、喜んで、年を聞くと、17才だという、親には3男で、まだ名乗はついていないと聞くと、義経は、その住んでいる所の名の鷲尾を取り、自分の名乗の1字を与えて鷲尾三郎経春と名のらせた。さて経春に、ここから城の方へ下りる路はないか

第19話 平氏の滅亡

と聞くと、<sup>つねはる</sup>経春は、「10丈20丈(30-60m)という屏風を立てたような切立ての崖ですから、とても馬の通れるところではありません」という。<sup>よしつね</sup>義経は、「では鹿は通るか?」と聞くと、「鹿は通ります。寒くなると、<sup>たんば</sup>丹波の鹿が一の谷から丹波に帰ります」と答える。<sup>よしつね</sup>義経は、「鹿にも足が4つ、馬にも足が4つだ。鹿の通るところならば馬も通る筈だ」とて、乃ち<sup>すなわ</sup>経春を案内に立て、<sup>しゃにむに</sup>遮二無二馬を進めて、その夜のうちに一の谷のうしろの<sup>ひよどりごえ</sup>鴨越に登った。



いち たに かつせん  
一の谷の合戦

まだ微暗い <sup>ほのくら</sup> 暁の光の中に、東は淀河尻から西の宮、南は淡路島、西は明石の濱まで一眺めに見渡されて、遠く打ち連なった<sup>う つら</sup>白波の寄せては返す汀に続いて火の見えるのは、平家の陣の<sup>かがりび</sup>篝火である。<sup>よしつね</sup>義経はしばらくここで人馬を休めて、やがて夜が明けはなれると、更に進んで平家の陣の真後ろの崖際に出た。見下ろすと、もはや西の門までも東の門までも戦いが始まって、<sup>やさけ</sup>矢叫びの聲は海と山に響いて物凄しい。時は今ちょうどいい。

少しでも早く落とそうと気はいらったが、その傾斜は<sup>けいしゃ</sup>小石交じりの<sup>ま</sup>白砂で、馬が足の立てようがない。誰も彼も<sup>だれ かれ たづな ひか</sup>手綱を控えてためらうと、馬も恐れて進まない。<sup>よしつね</sup>義経は<sup>よしつね</sup>試みに数匹の馬を上から追いついて見た。足を折ったり<sup>ころ</sup>転げ落ちたものもあつたが、その中で、<sup>くら お</sup>鞍を置いたのが3匹だけ無事に降りて、<sup>みぶる</sup>身震いして立ったので、<sup>よしつね</sup>義経は、「馬はてんでん(一人ひとり)が気をつけて落とせば、大丈夫だ。おれを手本とせよ」とて、<sup>てほん</sup>凡そ30騎ばかりを<sup>およ</sup>従えて、<sup>したが</sup>真先にその<sup>まっさき</sup>子砂利の<sup>こじやり</sup>坂を落としたので、3,000余騎の兵もつづいて落とした。

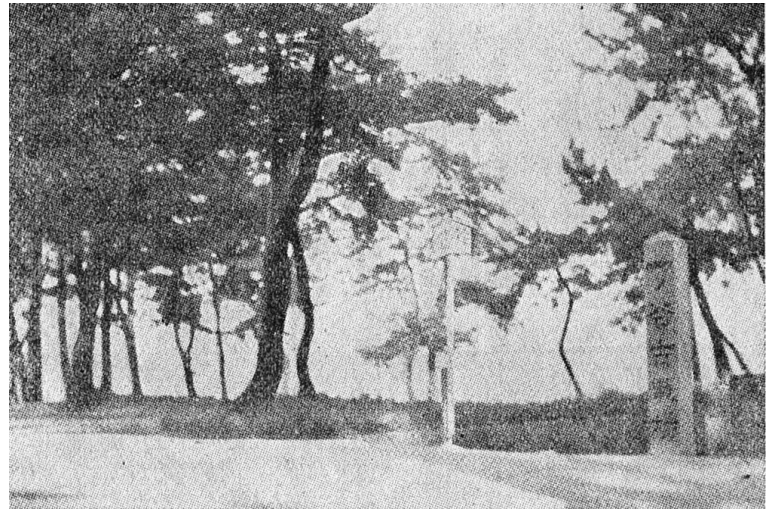
ところが、2町ばかりもさらさらと落として、<sup>だん</sup>平たい壇のような所におけると、そこから下は14-5丈もある<sup>いわ</sup>大巖が、一面に<sup>こけ</sup>苔が蒸して<sup>む</sup>真直ぐに<sup>まっすぐ</sup>突立っている。先には<sup>つつた</sup>進みようがない。といって、うしろへ引返すことも出来ないのので、「これはどうだ!」と皆が呆れていると、<sup>あき</sup>三浦の<sup>みうら</sup>十郎<sup>じゅうろう</sup>義連<sup>よしつね</sup>という者が、「おれの方では、<sup>あさばん</sup>朝晩この<sup>ぐらい</sup>位の<sup>か</sup>ところは<sup>まっさき</sup>駆け歩く。ただ落とせや」とて、<sup>か</sup>真先に<sup>くだ</sup>駆け下ったので、3,000余騎もこれに続いたが、さすがに<sup>ふさ</sup>不安な気がして、目を塞いで落とした。逆も人間のする事とは思われなかった。<sup>はたけやましげただ</sup>かの<sup>けが</sup>畠山<sup>あいば</sup>重忠<sup>みかづき</sup>が、馬に怪我をさせてはいけなからとて、<sup>おおづな</sup>愛馬の<sup>せ</sup>三日月を<sup>お</sup>大綱で背負

い、椎の木を杖に突いて、岩の間をしづしづと下りたと伝えられるのはこの時の事であります。

さて、3,000 余騎は不思議に人も馬も怪我らしい怪我もせず下り立つと、白旗 30 旗をさっと揚げて、一時にどっと関を作った。それが山々谷々に反響して、100,000 騎も押寄せたように凄まじかった。

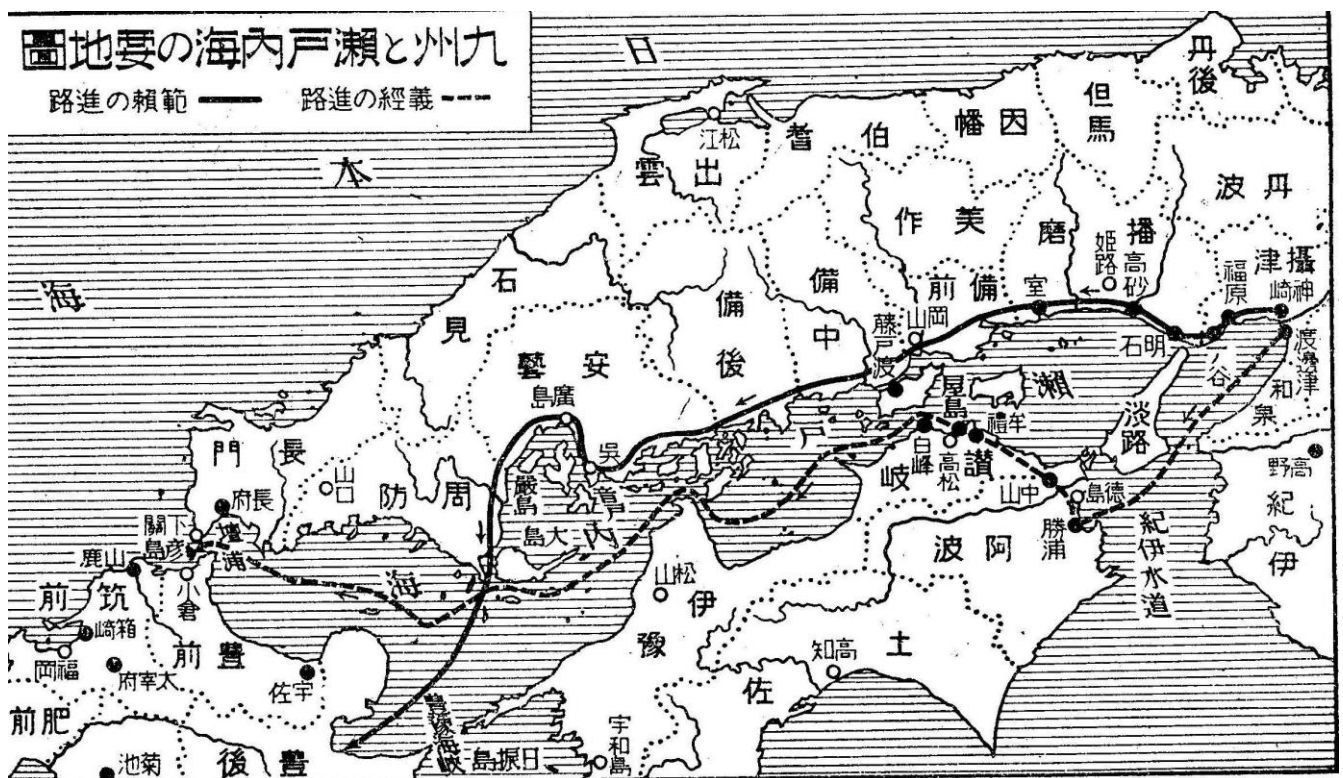
平家の軍の総崩れ

平家は、東西の門にこそ力を入れて防いでいたが、削り立てたような巖石から敵が攻込もうとは思ってもいなかったの、全くあわてて、うろたえた。義経はこれに乗じて、火を敵の陣屋に放たせると、折柄、西風が烈しく吹いていたので、忽ち猛火は八方に燃え広がる。平家の兵は焰と煙に追い立てられて、いよいようろたえて逃げ回る。



兵庫 一の谷の古戦場

その間に、源氏は東西の門を破って、どっとなだれを打って攻め込んだ。平家の軍は総崩れとなりました。



平家の軍の総崩れ

平家は、東西の門にこそ力を入れて防いでいたが、削り立てたような巖石から敵が攻込もうとは思ってもいなかったの、全くあわてて、うろたえた。義経はこれに乗じて、火を敵の陣屋に放たせると、折柄、西風が烈しく吹いていたので、忽ち猛火は八方に燃え広がる。平家の兵は焰と煙に追い立てられて、いよいようろたえて逃げ回る。その間に、源氏は東西の門を破って、どっとなだれを打って攻

め込んだ。平家の軍は総崩れとなりました。

宗盛はあわててまた天皇を奉じて、海に浮かんで屋島に向った。そのあとから平家の兵はわれもわれもと海辺に駆けて、先を争って船に飛乗ったが、あまりにあわてて、一艘に何百何千と乗ったために、その内の何艘かは見る見るうちに沈んでしまった。

熊谷と敦盛

こうして平家は半年かかって漸く取り返した福原の地をも、ただ一日で追落とされたが、この時、平家の軍で戦死した者は非常に多く、その一門のうちでも忠度、通盛、経正、経俊、国盛、師盛、業盛、知章、敦盛らは戦死し、重衡は虜にされた。

この内、無官太夫敦盛が熊谷次郎直実に組み敷かれて、首を取られるまでの物語は、一の谷の合戦の中でも殊に哀れな話として広く世に伝えられています（訳注：謡曲「敦盛」）。



兵庫 一の谷 熊谷次郎直実が平敦盛を呼び返す

さて源氏は、一の谷で大勝利を得たが、自分の方には水軍がないのですから、見す見す平家の軍が四国へ渡って行くのを浜辺に立って見送りながら、どうすることも出来なかった。で一先づ、兵をまとめて、京都に還った。

平家の勢い、また振う

ところが平家のほうでは、宗盛は安徳天皇を奉じて屋島にいたが、弟の知盛は長門の彦島に本陣を構

## 第19話 平氏の滅亡

えて、今の関門海峡を守って威を振るっていたので、九州の武士もその多くは彼の手に加わって、平家の勢いはまた盛んとなった。頼朝はこれを聞くと、先づ、九州を征服して平家の逃路を無いようにするために、寿永3年8月、範頼に大軍を授けて山陽道から九州に向わせた。

### のりより 範頼、九州に苦しむ

のりより 範頼は10月に安芸に入り、11月には進んで周防から長門に入ったが、知盛が関門海峡を守っている上に、船がないので海を渡ることが出来ない。遥かに九州の地を望みながら、空しく日を暮らしていたが、幸いに翌4年正月になると、豊後の人で源氏の身方についての者が82艘の兵船を送って来たので、それに依って海を渡って、初めて九州の地へ入った。しかし、兵糧が乏しく、これを徴発する道がなかったもので、部下の将士で関東に帰ることを望む者が非常に多く、範頼はただ困っていた。

### よしつね のりより たす 義経、範頼を援けようとする

よしつね 義経は京都にいてこれを聞くと、この上ぐづぐづしていると、範頼の軍はついに全く兵糧が尽いて、空しく九州から引き上げねばなくなるかも知れない。もしそうになると、平家の勢いはますます強くなって、容易に滅ぼすことは出来なくなるであろうと考えたので、今のうちに、自分が進んで屋島を攻めることにしたいと法皇にお願いした。その頃、法皇は特に深く義経をご信任になって、京都の警護をさせていたので、なるべく手許から離れさせたくなく思われたが、義経が再三お願いしたので、それならばと、ついに御許しになった。

### さかろ あらせ 逆櫓の争い

よしつね 義経は寿永4年正月10日に京都を立って、摂津に下り、渡邊の津 - 今の大阪の西方 - というところで海を渡る準備をしていた。2月の半ばになって、漸く船の用意は出来たが、元来、東国の兵は海には慣れていなかったもので、ある日も今度の海戦についての評議を始めた。その時、梶原平三景時が進み出て、「船に逆櫓を立てたらどうですか?」といった。よしつね さかろ 義経が、「逆櫓とは何か?」と訊くと、「逆櫓とは船の舳先にも櫓(注:船尾)へ向けて櫓を立てることで、これが陸上の軍なら、馬に乗っているのですから、進むも退くも自由ですが、船軍はそうは行きませんが、進みすぎると急に押戻すことはむづかしい。ですから、舳先にも櫓をつけて置いて、敵が強くなれば舳先の櫓で押戻し、敵が弱ければ櫓の櫓で押し進むようにしたら良からうかと思うのです」といった。

よしつね いくさ 義経は、「軍に出ては、一步も引くまいと思っても引き易いものなのに、況してや初めから、そういう逃支度をして置くようでは逆もいけぬ。他の船には逆櫓でも逆さま櫓でも立てるがよい。よしつね 船には無用だ」というと、梶原は重ねて、「進むべき時には進み、退くべき時には退いて、身を全うして敵を倒すのが良い大将です。進むことのみを知って退くことを知らないのは猪武者だ」といったので、よしつね いのしし しか 義経は、「猪でも鹿でもいい。よしつね 義経はただ進んで敵に勝つのが愉快なのだ。そんなに命が惜しいならば、初めから軍になど出ないでいいのだ」とて、たが つの 互いに言い募って、しまいには大喧嘩にまでなりかけたが、そばにいた大勢の者が双方を宥めて、漸くその場は無事におさまった。

## 第19話 平氏の滅亡

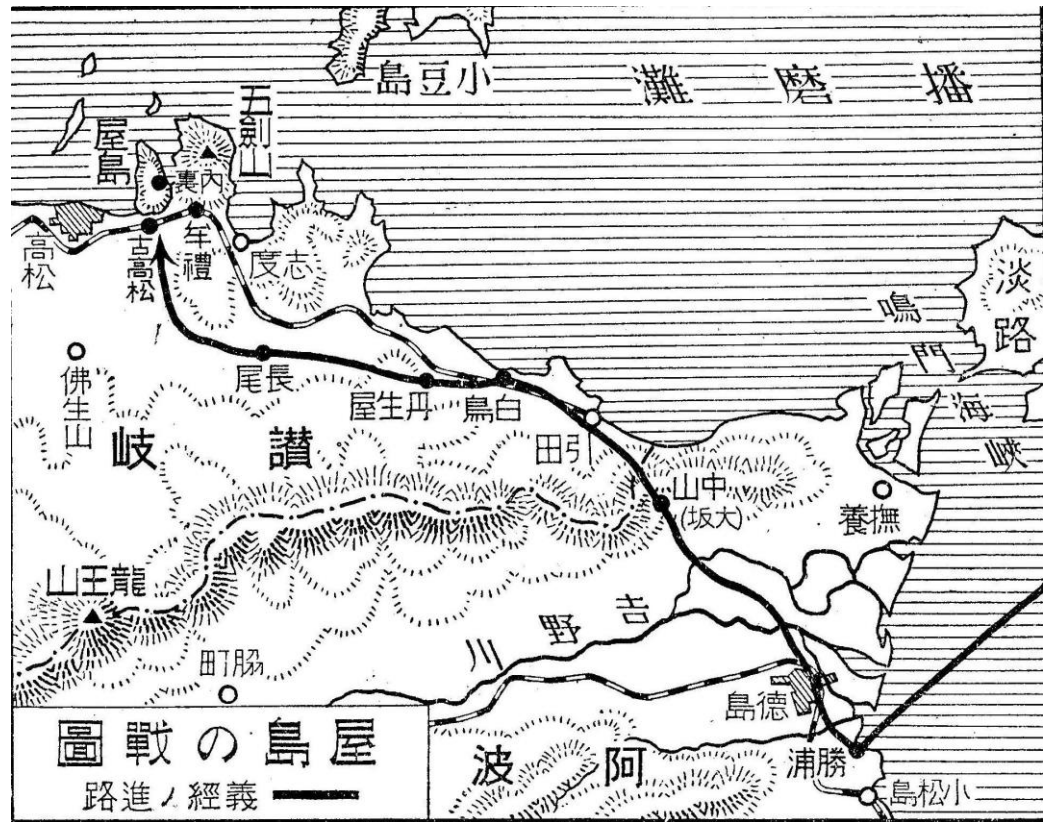
### よしつね れっぼう 義経、烈風に船を出す

さて、既に船の用意は出来た、今は1日も早く出発しようとしていると、折悪しく南風が俄かに強く吹き起こって、船を渚々に吹き上げた。破損した船も少なくなかった。で、急いでその修繕にとりかかったが、風はますます強く、2日2夜を吹き続けて、少しも衰えなかった。しかし、2月17日の夜になると、雨が俄かににひどく降って南風が静まると、北風が烈しく吹き出した。木を折り小石を飛ばす程の勢いでしたが、ともかくも順風です。義経は急に命を下して、「風向きが直った。急いで船を出せ」というと、船頭もびっくりして、「この大風に、どうして船が出せます。風が少し弱ってからにして下さい」といった。

義経は大いに怒って、「向い風に船を出せと言ったら無理だろうが、順風だというのに、強いと出して出さない奴があるか。さあ、出せだせ。出さない者は、それ者共、射殺せ、斬殺せ」と烈しく言いつけると、伊勢三郎義盛、佐藤三郎継信、同じく四郎忠信らが弓に矢を番えて嚇かしたので、船頭は、どうせ死ぬなら船をだしてこそ死ねと観念して、200余艘の中で5艘だけ用意した。義経は真っ先の船に乗り込んで、篝火をひとつ自分の船だけに焚きつけさせて、他の船はそれを目当てに後をつづかせることにした。敵に船の数を知らせないためです。5艘の船に乗り込んだものは、僅かに150騎に過ぎなかったが、これらはいづれも一騎当千の者共ばかりでした。

### やしまたたか 屋島の戦い

さて恐ろしい烈風の中を、18日の午前2時に渡邊を發した船は、いつもならば3日かかるところを僅かに4時間で、朝の午前6時には早くも阿波の東海岸の勝浦に吹付けられた。不思議に5艘の船が一艘もあやまちもなく、皆、同じ所に漕ぎつけたのでした。



義経は上陸すると、路々、100騎、200騎と固まっている敵の守備兵を追い散らし、蹴散らしながら進んだ。やがて100騎ばかりの阿波武士が身方につくと、それを案内者として、その夜のうちに、阿波と讃岐の国境の山を越えて、翌19日の午前8時には早くも屋島の内裏の対岸に着いて、そこの民家に火を放った。

平家のほうでは、全く油断していたところで、俄かに炎々と燃え上がる火を見ると、一づに敵の大軍が押し寄せたものと思ひ込んで、「取籠められては大変だ！」と、内裏の総門の前の汀にいくつも著け並べておいた船に、我もわれもとあわてて乗った。天皇の御座船には御母の建礼門院、清盛の妻の二位の尼を始めとして、多くの女官が乗り、宗盛はその子の清宗と共に一つの船に乗った。その他の人々も思い思いにあわてて乗って、急いで沖へ漕ぎ出した。

### 平家の根拠地を焼く

そのあとに源氏は7-80騎で押寄せたが、平家は既に遠くの海の上に逃げてしまっていたので、互いに遠矢を射かけるぐらいで、はかばかかしい軍のしようも無かった。そのうちに、義経に従って来た後藤兵衛実基という者は、殊に軍の経験に富んだ古兵でしたから、無駄な遠矢の軍などはせずに、内裏に乱れ入って、火をつけてこれを焼き払った。平家の根拠を全く無くして、2度と陸地へ近寄せないためです。

### 佐藤継信の忠死

ところが、平家の方でも、やがて源氏が小勢なのに気がつくのと、余りにあわてて船に乗って、内裏を焼かせてしまったことを口惜しがったが、もう追いつかない。殊に強いので有名な能登守教経は、いかにも残念でたまらないと、船を陸に漕ぎ戻して、大将の義経を一矢で射て落とそうと狙いをつけた。しかし源氏の方でもそれを悟って、義経の前には、伊勢三郎義盛、佐藤三郎継信、四郎忠信、武蔵坊弁慶などという一騎当千の者どもが、馬の頭を一面に並べて馳塞がったので、さすがの教経もどうすることも出来ない。「邪魔だ。雑兵ども」と罵りながら、さんざんに射ると、見る見る10騎ばかりの源氏の武者が射落とさたが、中でも真先きに進んだ佐藤三郎継信は左の肩から右の脇へ射抜かれて馬から逆さまにどうと落ちた。教経の家来の菊王丸という少年が駆け寄ってその首を取ろうとすると、継信の弟の忠信が、兄の首を取らせまいと菊王丸を射倒した。教経はこれを見ると、左の手に弓を持ちながら、右の手で菊王丸を掴んで船へからりと軽く投げ入れたが、菊王丸は傷が重くて死んだ。

### 主従の情

一方、義経は継信を陣の後ろに擔いで行かせて、急いで馬から下りて、手を取って、「どんなだ、継信！」というと、継信は、「もうだめです」という。「何か言い残すことはないか？」と問うと、「別に何もございませぬ。ただ、あなたのご出世を見ずに死ぬのが残念なだけです。しかし、源平の戦いに奥州の佐藤三郎継信という者は、讃岐の屋島の磯で、主君のお命に代わって討たれたと、末の世までも語り伝えられるのは、嬉しいことです」といって、次第に弱って行った。継信は、時に28才でした。

義経は余りに哀れに思っ、鎧の袖を顔に押当てて、さめざめと泣いていたが、若しこの辺に、尊い坊さんはいないかと、尋ね出させて、それに秘蔵の馬を与えて、継信をよく吊ってくれるように頼んだ。この屋島の戦いには、名高い美談として伝えられている話がもう2つあります。1つは、那須与一の「扇的」で、1つは義経の弓流しです。

## 第19話 平氏の滅亡

### おうぎ まと 扇の的

「扇の的」は、この日の夕方、一先づ休戦にしようと互いに退きかけた時に、沖の方から美しい官女を乗せた1艘の綺麗な船が漕ぎ出して来て、その舳先に立てた長い竿の先の、赤地に金の日の丸を書いた扇を源氏に射させようと、陸に向かって招いたのを、大将義経の命を受けて、下野の国の住人、那須与一宗高という17才の若者が、1矢で射落として誉れを挙げた話です。

### ゆみなが 弓流し

「弓流し」は、そのあとで、また合戦となった時の事です。海の中まで敵を追いかけて行った義経が、どうしたはずみか、弓を海中に落として、それが波のまにまに流れていくのを、敵が熊手や鎖鎌で義経の胄を引っ掛けようとするのを、片手で防ぎながら、俯伏せになって、鞭の先でかきよせかきよせ、やっ取り上げた。笑って陸に帰ってくると、年を取った侍どもが苦い顔をして、「たとえ、どんな立派な弓であろうとも、お命には代えられないのに、大將軍ともあろうものが何という軽率な事をなさるのです」といった。

義経は、「弓が惜しくて取ったのではない、義経の弓が、2人で張り、3人で張る叔父の為朝のようなのであれば、わざとでも落としてとらせるのだが、この弱い弓を敵に取られて、これが源氏の大將の弓かとあざ笑われるのが口惜しいから、命に代えて取ったのだ」といったので、皆が感心したという話です。いかに義経が些細な事にも注意して源氏の面目を損じまいとしていたかが分かるではありませんか。

### 平家、また西に走る

さて平家は、ただ1日で屋島の根拠地を全く奪われたので、その翌日は屋島の東方2里(8km)ばかりの志度の浦という処に漕寄せて陣を取ったが、ここも忽ちまた義経に攻立てられて、四国に全く足だまりが無くなると、またもや海に浮かんで九州に向った。長門の彦島の知盛の軍と一緒にいる外はなかったからです。

ところで、摂津の渡邊の津に残って、海の風ぐのを待っていた源氏の兵船200余艘は、梶原景時を大將として、屋島の戦いの後の3日目の朝、やっとな屋島の磯に着いたが、今は全く後のまつりで、笑われたばかりでした。さすがの景時も、この時はさぞ不面目な思いをしたことでしょう。

### ひこしま たてこも 平家、彦島に拠る

さて平家の一門は、九州を指して船を進めて行ったが、範頼が豊後を守っているために上陸が出来ない。知盛が本陣を置いている彦島の外は、山陽道の諸国も今は悉く源氏の身方となってしまったので、瀬戸内海の沿岸に船を着けるところがない。よんどころなく彦島の附近に船を浮かべて日を送っていたが、しかし、海戦は源氏が不得意なのを知っていたので、たとえ東国勢がやって来ようと、のるかそるかを決戦は花々しくしてくれようと、悪びれもせずに待っていた。

一方、義経は屋島を占領して後、ちょうど1ヶ月間そこにおいて兵船を集めていたが、3月22日に出発して周防に赴き、そこにいた身分の者を案内にして、更に長門の万珠島の辺まで進むと、平家は彦



## 第19話 平氏の滅亡

島から出て来て、豊前の田野浦の沖に陣を取った。両軍の距離は、海上凡そ30町(3.3km)に過ぎなかった。斯くして寿永4年3月24日、源氏と平氏はいよいよ最後の決戦をすることとなったのです。

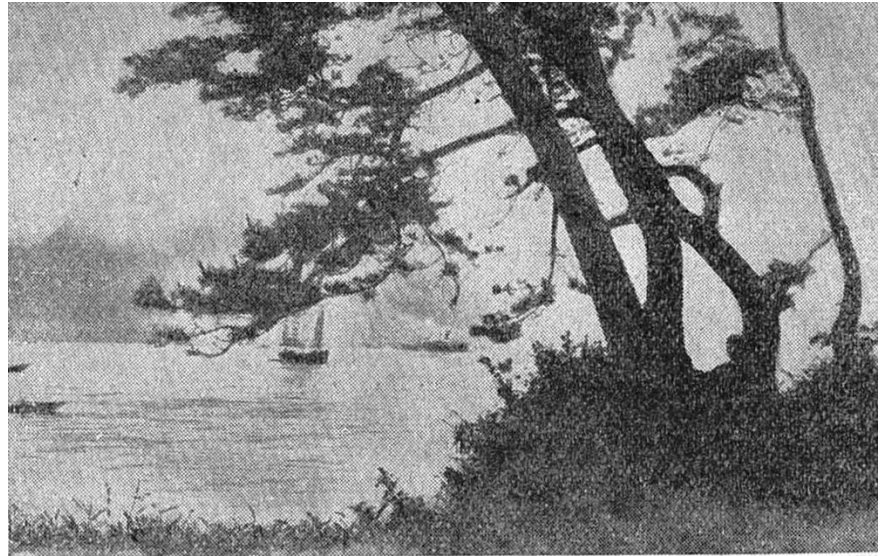
### せんじんあらそい 先陣争い

ところで、この時もまた義経と梶原とは危うく同士軍をすることでした。初め梶原が進み出て、今日の先陣は、景時にさせて下さるよといつたのを、義経が、先陣は自分がするよと許さなかったの、梶原が、「あなたは大将軍だから、先陣などをなさるべきでない」といって、義経は、「大将軍は鎌倉の兄上である。義経もお前方も共にご奉公の身で変わりはない」といった。

それを梶原が素直に聞かずに、「この人は武士の頭になれる人ではない」と呟いたので、義経が怒って、「お前は日本一のばか者だ」とて、刀の柄に手をかけると、梶原も刀の柄に手を懸けた。売言葉に買言葉で、喧嘩は昂じたのだが、恐らく2人の間に逆櫓の論の時から心にこだわりがあったのでしょう。この時もまた、家来共が双方を宥めて無事に納まったが、こういう事がたびたびあったために、後に義経は梶原に讒せられて、ついに身を滅ぼすようになったのだという事があります。

### だん うら 壇ノ浦の戦い

さて、源平の合戦は24日の正午頃から始まった。源氏の船は800余艘で、平家の船は500余艘で、船の数は源氏の方が多かったが、源氏は海戦には不慣れであった上に、平家が折柄の満潮を利用して船を進めて来たので、一時は源氏の形勢が悪かった。



山口 長門の壇ノ浦

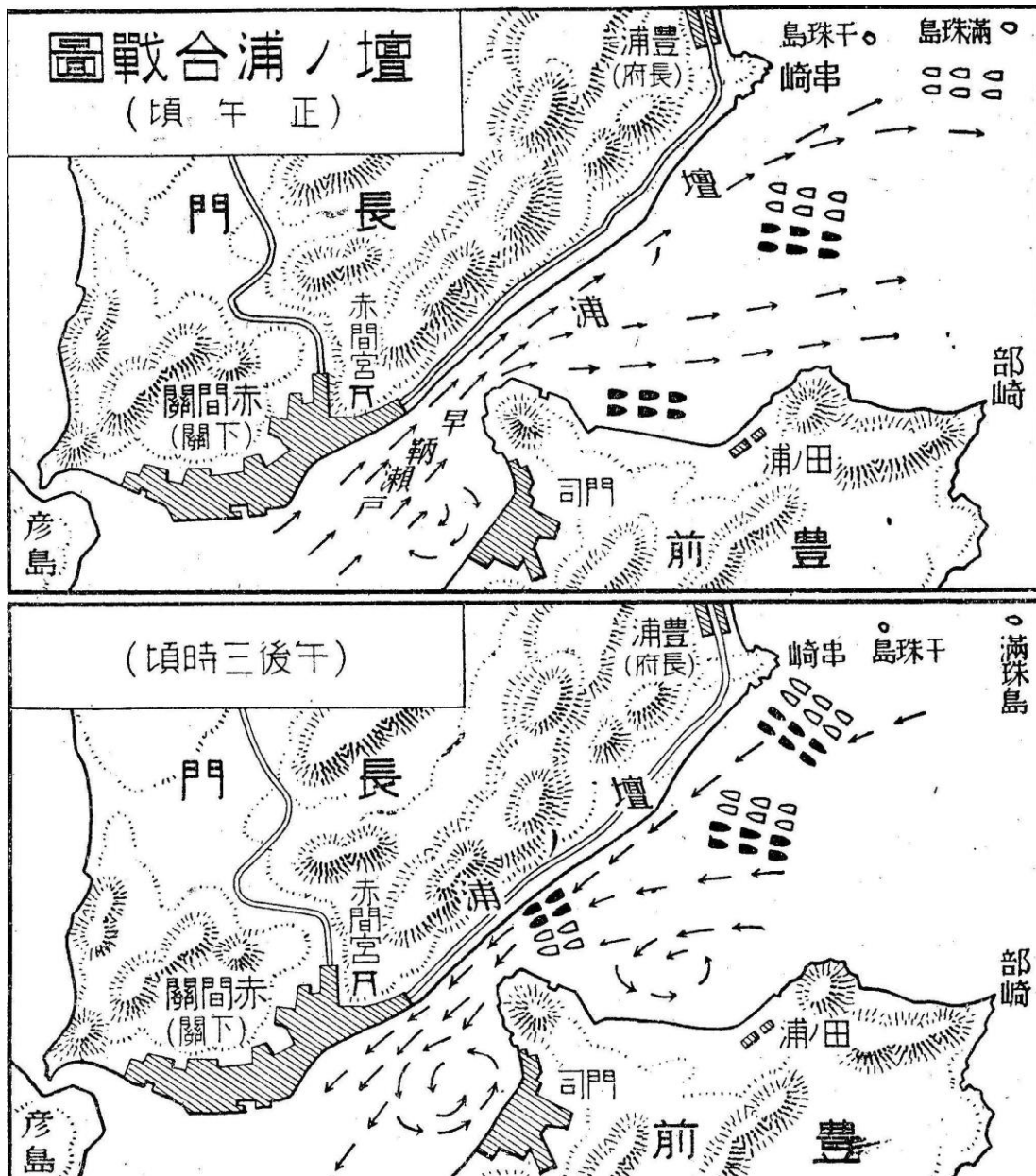
宗盛は天皇を普通の船に遷し奉り、御座船には士卒を乗せて、源氏が御座船を目がけて攻めて来るのを挟み撃ちにしようと構えていた。しかし平家を裏切って、その秘密を義経に知らせた者があったために、源氏はその計略には陥らなかった。そして、踏みこたえこたえて、防戦をしているうちに、時刻が移って、潮流が変わった。今度は平家の船が押流されて、遂に長門の壇ノ浦まで来ると、急に形勢が悪くなりだした。

午後3時過ぎには平家は全く敗北した。

### とももり 平知盛

知盛は小船に乗って、急いで安徳天皇のお船に参って、「いよいよおしまいです。見苦しい物などは皆海に入れて、船の掃除をなさいます」とて、掃いたり、拭いたり、塵を拾ったり、艫や舳先へ走り回って、手づから掃除をした。

天皇のお側にお仕え申している女官達が、軍の様子を問うと、「間もなく珍しい東国武士をご覧になる事になりましょう」といって、からからと笑った



二位の尼

二位の尼は予ねて斯ういう事もあるかと思ひ設けていた事でしたから、今はこれまでと覚悟を極め、天皇を抱き奉って舷に立った。この時、天皇はまだ8才のご幼年にましましたが、宝剣を腰にさし、神璽を脇に挟んだ二位の尼をご覧になると、惘れさせられたご様子で、「一体、どこへ連れて行こうとするのか？」と仰せられた。

二位の尼は涙をはらはらと流して、「この国にはいやな事ばかりでございますが、あの青い波の下には極楽浄土と申して、美しい都があります。そこへお供をいたすのでございます」と申し上げて、伊勢大明神に最後のお暇乞いをおさせ申してから、天皇を抱き奉ったまま海の底へと沈んだ。天皇の御母の建礼門院も続いて海に入られたが、これは源氏の武士がすばやく見つけて、お救い申した。

教盛と経盛の兄弟は手に手を取組み、鎧の上に錨を負うて海に沈んだ。が、宗盛とその子の清宗だけは、そうもせずに、舷に立って、ぼんやりと四方を眺めていたので、平家の侍共がその臆病な

## 第19話 平氏の滅亡

のを歯がゆく思って、側を通る風して、先づ宗盛を海に突落とした。これを見て、清宗も続いて海に飛び込んだが、もとより死のうとする気は2人共になかったのだから、浮いて泳いでいるところを源氏の武士に引き上げられて、虜にされた。

### 能登守教経

そういう中で、最後までさんざんに暴れまわったのは能登守教経でした。彼は独りで踏止まって、矢種のある限り射てしまうと、今度は片手に大太刀、片手に大薙刀を持って、相手構わずに切って切って切りまくった。知盛は遠くからこれを見ると、使いをたてて、「今さら雑兵どもを殺したところでどうなる。好敵でもあればだが」といわせた。

「そうだ、大将とこそ組むべきだ」とて、義経を探し回っているうちに、うまく義経の船と擦違ったので、教経は、つとその船に飛び乗って、名乗りをあげて飛びかかった。義経は、組まれては叶わないと思ったのか、薙刀をば左の脇に搔挟んで、2丈(約6m)ばかりも隔てている身方の船に、ひらりと飛び移って、舷に立ってにっこりと笑った(訳注：義経の八艘跳びといわれています)。

さすがの教経も、この早業にはただ呆れてぼんやりと見送っていたが、今はもうこれまでと、その船の中をさんざんに荒れまわった末に、30人力はあるという源氏の武士が3人一時に飛びかかったのを、1人は蹴て海に落とし、残る2人を左右の脇に搔挟んで、「死出の山のお供をしろ」とて、念仏を唱えながら海の底へ沈んでしまった。時に年は26才でした。

### 平家の一門、海に沈む

知盛はこれを見ると、「さて、見るべき程の事は見た。今はただ死ぬだけ」とて、家来に重い鎧を2領着せさせて、やはり重い鎧を2領着たその家来と共に、手を手を組んで海に沈んだ。年は34才でした、残っていた侍共も、われもわれもと海に入った。

かくして平家は滅びた。実に清盛が太政大臣になった時から19年目、頼朝が兵を挙げた時から6年目でした。驕るものは久しからずという通り、一時は豪奢の限りを尽して、この一門以外の者は人に非ずとまでいって威張っていた平家も終に滅びたのであります。

### 神器、都に還る

この時、三種の神器の内、神璽と宝剣とは安徳天皇と共に一旦海底に沈んだが、神璽は間もなく御箱のまま水面に浮かんだのを、片岡太郎経春という源氏の武士が取り上げ奉った。宝剣は再びは浮かんでこなかった。それで、義経は、神鏡と神璽を奉じて都に凱旋して、これを法皇に奉った。宝剣は、その後、潜水の上手な海人を募って海底を捜させたが、ついに見つからなかった。実に、崇神天皇の模造になった神剣は、こうして凡そ1,000年の後に海底に失われてしまったのです。その後、伊勢の大神宮から献上した神剣を以って宝剣と定められて、それが今日まで伝わっているのです。

### 宗盛と清宗

## 第19話 平氏の滅亡

さて、平家の一門は壇ノ浦の戦いで大抵はいさぎよく亡びたが、臆病者の宗盛はその子の清宗と共に共に捕虜となって、後の世までも恥をさらした。この2人は、同じ年の6月に義経に送られて鎌倉に入ったが、頼朝の前に引出されると、宗盛は卑怯にも命を助かりたいと願ったので、頼朝はおおいに呆れ、いっそ自殺させる事にしようと思い、俎の上に大きな魚を置いて、これに包丁を添えて宗盛の前に差し置かせた。けれども、宗盛はその意味を悟らなかったので、再び義経に京都におくり還させる事にして、その途中、近江の篠原というところで斬らせた。宗盛は39才、清宗は17才でした。

### しげひら まつる 重衡の末路

又、一の谷の戦いで捕虜となったし重衡も、この時に、奈良の僧徒の手に渡されて斬られたが、これは治承四年に彼が清盛の命を受けて、東大、幸福の2寺を焼き払った報いをその地で受けさせたのでした。

### あかまぐう じゃっこういん 赤間宮と寂光院

ただ、いかにもお痛わしかったのは安徳天皇のお身の上であります。繋がるご縁の為とはいえ、まだご幼少の折から、平家の一門と共に西に東に漂われて、ついに海にお沈みになったのです。何という御運の拙いことでしょう。天皇のお遺骸は、戦いの後に、土地の者が海中に求めて、これを壇ノ浦近くの地に葬り奉った。今、下関市にある阿弥陀寺の御陵がそれで、そのそばにある官幣中社赤間宮は天皇をお祀りした社です。

又、御母の建礼門院は、一旦海に沈まれたのを源氏の武士に救い上げられ、やがて京都へ送り還されたが、その年の5月、29才で髪をお剃りになって、尼となり、京都の北の大原の奥の寂光院で静かにその一生を送られて、第84代順徳天皇の御代に57才でお亡くなりになりました(訳注:謡曲に「大原御幸」があります)。

( 第19話 平氏の滅亡 終わり。 次は前頁に戻り、 第20話 頼朝と義経の不和 へ)